

4 歳児の遊びの始まりと終わりの変容

浅井かおり（東京家政大学大学院¹）

¹ 人間生活学総合研究科修士課程 1 年

I 研究の背景と目的

幼児にとって遊びは生活である。応答的な環境の中で幼児は遊びを充実させ、遊びを通して学んでいく。一方で、幼児だけに任せた遊びは、遊びたいことが見つからないことや停滞や固定化等を招きやすく遊びの充実にはつながらないことが多い。そこで、保育者の支援が必要になる。保育者は幼児の遊びを広げたり深めるための支援をしたりすることで、幼児の遊びを充実させ、自発的に学んでいく手助けをする必要がある。遊びの始まり方、あるいは終わり方と月齢の関係の先行研究はあるが、本研究では保育者による子どもの遊びの充実を目的とした支援の観点から、遊びの始まりと終わりを総合的に検討する。

II 研究の方法

本研究では首都圏内の認定子ども園の 4 歳児の自由遊びを対象とした。4 歳児を選択した理由は、4 歳頃になると他者への興味や思いを感じ取り自分で行動するようになる。また想像力や社会性が発達し、自分であるいは集団で遊びを工夫することができるようになる。保育者が遊びを支援することで、子どものいっそうの工夫（視点を変える、やり方を変えるなど）を促すことで、遊びの変化が生じやすく、遊びがどのように変化したか、仲間意識の高まり、今のその子の興味・関心といった育ちを明確に観察することができると考えたためである。調査期間は 2016 年 5 月から 10 月まで（8 時 30 分から 11 時まで）学期ごとに 3 回のビデオ撮影と観察記録を作成した。遊びの始まりと終わりを観察するために自由に活動することが尊重される時間の保育を撮影し、他者との関係性や頻度を分析した。

III 結果 4 歳児の遊びの始まりと終わり

年度当初の遊びの始まりは、やりたい遊びが見つけれず部屋を歩き回ったり、他児のやっている遊びを傍観したりと、遊びが始まるまでに時間がかかっていた。また保育者の意図的な環境構成や働きか

けがきっかけとなり、遊びが始まるが多かった。遊びの終わりは、製作を仕上げた後や濡れた服を着替えに行くなど、自分で区切りを付けて終わりを迎えていた。時間が経つにつれ、遊びの始まりは、自分のやりたい遊びをすぐに見つけ遊び始めたり、特定の友達を見つけ誘ったりと変化した。遊びの終わりは、他児との関係性が深まることにより、他児の思いを感じ取り遊びを辞められず継続する姿が見られた。また遊びの終わりは時間の制約により終わりを迎えることもあった。

IV まとめ

遊びの始まりと終わりは、他児との関係性の深まりによって変容したことが明らかになった。それが強く表れた場面が遊びの始まりと終わりであり、その子の遊びに対する思いや仲間意識等の今の育ちを見ることができた。そのため保育者は、遊びの過程だけを把握するのではなく、遊びの始まりと終わりを捉えて援助していくことが重要である。また保育者が意図的に設定した環境構成をきっかけに遊びを始めたことから、環境構成も遊びの充実を考える上で重要な要素であることがわかった。そのため、遊びの始まりと終わり場面での子どもの育ちを見極め、次の遊びに繋がる環境構成の工夫が随時必要である。とくに、遊びの終わり場面から捉えることのできる育ちは、毎日同じ時間に片づけを行なう際には捉えることが難しいだろう。そのため、1 日の活動の流れもあるが、子どもの遊びの様子によっては、片づけの時間を延長し遊び時間を増やすなど、柔軟な保育運営をすることも遊びの充実を考える上では重要である。

今回は H を中心に分析を行なったため、4 歳児全般にみられるものなのか、幼稚園や保育所など生活時間が異なる園との違いが次の課題である。